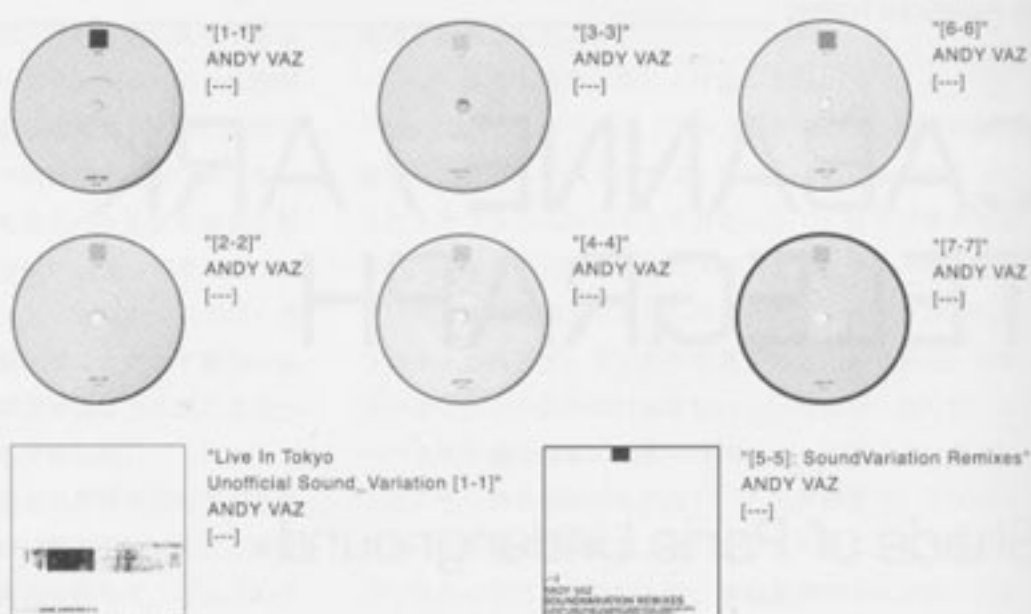


BACKGROUND ANDY VAZ



Variations in Minimalism

INTERVIEW_ Nobuki Nishiyama
TRANSLATION_ Hashim Bharoocha
PIC_ Akiko Bharoocha

「12才の頃からずっと、ブロンクスの初期ヒップホップに影響を受けてきた。今でもヒップホップは自分の中でも大事なものであり続けている。プギ・ダウン・プロダクションズの『By All Means Necessary』は僕のオールタイム・フェイバリットだし、僕の人生を変えた。そうしたヒップホップは反復的なラップとロウなビートだけでシンプルに構成されていて、だから初期のデトロイト・テクノやシカゴ・ハウスなんかにも興味を持つことは自然だったと思う。それからDBXやロバート・フッドがミニマル・テクノを打ち出した時、僕はこの新しい方向性に夢中になった。中でもテレンス・ディクソンが95年にリリースした『Minimalism』にはとても影響を受けていて、バックグラウンドは、このレコードの後にミニマル・エレクトロニック・ミュージックがどうあるべきかということを考えて設立されたものなんだ」

そのテレンス・ディクソンの『Bionic Man EP』をレーベルのファースト・リリースに据え、アンディ・ヴァズは、世界中に散らばるミニマル・テクノの俊英をレーベル、そして自らオーガナイズするパーティーを通してひとつに結びつけてきた。リズム・メイカー、デッドビート、キット・クレイトン、スーテック、アクフェン、サブマニア、デイヴ・ミラー、フリヴォロス、バン・トーンら、クリック・ハウスともリンクしながら精緻なミニマル・トラックを安定したベースで発表してきたバックグラウンドのレーベル・リリースは、オーナーであるヴァズ自身によってこう定義されている。

「A minimal futuristic form & function, combining art & soul, mind & body, sweat & intellect」

2001年、レーベル運営と並行して、アンディ・ヴァズは自身のソロ・ワークを纏めた12インチ・シリーズ『sound_variation』を開始した。これはバックグラウンド傘下（傘下にはハウス寄りのア・タッチ・オブ・クラスもあり、ここからはデュッセルドルフのリビート・オーケストラことアントネリ・エレクトリック、デトロイトのリック・ウェイド、ロンドンのSIカット・DB、カナダのアン

ナ・カウフェンことアクフェンがリリースしている)に新たに設立されたプライベート・ネームレス・レーベル、[---]（読み方に特に指定はなく、自由に読むか、あるいはサウンド・ヴァリエーションと発音する）から発表されている連作で、ジャケットに小さな正方形と長方形3つを控え目にあしらい、シンプルに[1-1][2-2]...と数値が順に並べられただけのこれらのリリースは、それまでプロダクション・ワークが未知数に包まれていたヴァズを取り巻く状況を急激に変化させるに十分なインパクトを放っていた。

「ようやく今まで考えていたことが纏まってきたって感じだね。音楽に対する情熱を通して、誰かと考えをシェアすることが必要だと思っていた。あるいは、今ある混沌とした様々なスタイルに、もうひとつパズルのピースを加えることで、リスナーのヴィジョンを具象化することのデモンストレーションを行いたかったんだ。そのパズルは決して完成されることはない——なぜなら音楽は常に発展していくもので、常に表現は書き換えられていくものだから——のだけど、もっとも僕は、明確な、誰にでも理解しやすい方法論に向かいたいわけじゃない。音楽はもっとパーソナルなものであるべきだと思う。かつてヒップホップがそうだった。かつてテクノもそうだったよね」

「sound_variation」シリーズは、ハウス・テンポの4つ打ちをベースに、アブストラクトでクリスピーな音像が奇妙な捻れとともに交錯し、素描的な要素と練り込まれた構成が不思議と同居する内容で、ともすればぼんやりとした音になってしまうだけのところを、ヒップホップからのバックグラウンドを確かに感じさせる、ビートのタメによって効果的なグルーブへと転化させている。シリーズ全体に渡って厳格に統一された音素材が特異なムードを生み出しているのだが、これはシリーズのコンセプトの一部が're-use'、再使用であることに起因するものだ。

「[---]のメインとなるアイデアは、通常レコード・レーベルの名前はそこからリリースされる音楽の、ある特定のジャンルやスタイルを表すものであるという事実と反すること、つまり、匿名的なプロジェクトであるということ



示したかった。バックグラウンドには厳格な作品定義があって、それはそれで好きなんだけど、このシリーズは、プロダクションのスタイルや音楽的な方向性、そして与えられたレーベル名から想像されるようなイメージによって限定されたものにしたくはなかったんだ。4つ打ちをベースにしたエレクトロニック・ミュージックでありながら特定の美学やコンセプトに沿うことはせず、それぞれのリリースはコンセプトががちりと決まっていなくてもいいし、またコンセプトなどなくてもいい。例えばシリーズの1番や2番は、再使用がコンセプトだった。同じ音素材をリサイクルして、EP全体においてすべて同じ音で構築する、しかも作曲上のアプローチや素材の文脈を元の形と切り離し、リアレンジ、トーン・シフト、エフェクトなどによってそれぞれの楽曲に独自の方向性を持たせること。そうすることによってローファイ的な、限定された状況による最大限の効果を生み出したかったんだ。だけど、別にトリッキーなコンセプト・アートを気取りたいわけではなくって、もっとパーソナルなものだよ。単純に、その時々で自分の制作手段に合う方法論をガイドとして導入しているだけなんだけどね」

これらヴァイナル・シリーズの集大成は、SIカット・DB、デイヴ・ミラー、クランダー、ゲオフ・ホワイト、ディーン・デコスタ、ミッチェル・アキヤマ、フリヴォロス、ポータブル、スミグリッスナが参加した『SoundVariation Remixes』(カタログ番号は5番だが、リリースは7番の後)に纏められている。このリミックス・アルバムは『sound_variation』のコンセプトをフォローアップしたもので、すべてのリミックスはシリーズで用いられたアンディ・ヴァズの音源のみで構築されており、独自にサウンド・ソースを加えることは許されていない。全体の印象としてはまさに『sound_variation』シリーズのそれでありながら、各楽曲の構築手段にそれぞれのアーティスト個別のアプローチが際立つユニークな作品だ。アンディ・ヴァズの方法論を端的に拡げるリリースとして注目したい。